

Title	反町文書(六)
Sub Title	The Sorimachi manuscripts (which once belonged to the Sorimachi family, now possessed by Keio University library) : their transcription and comments (6)
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.34, No.1 (1961. 7) ,p.111- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610700-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

反町文書(六)

(補遺)

一五二、淺井長政書狀 (折紙)

御同□□□□博□□儀ニ付令ニ違亂一候、然間□□
門已下對奉公□□兼被ニ相渡一候、貴所ニ□□□□如レ此
候、不レ寄ニ多少一、於レ被ニ隱置一者、太可レ爲ニ御越度一候、
尙以可レ被レ成ニ其心得一候、恐々謹言、

閏五月廿七日

淺備
長政 (花押)

一五三、佐竹義重書狀

今度、當地小田拘付、田土邊之郷、完塚吉瀬、速借置候
事、太悅ニ候、土浦木田余、落居之上者、無ニ相違、可ニ返
進一候、謹言、

五月十八日

義重 (花押)

反町文書(六)

小貫佐渡守殿

一五四、德川家康朱印定書

定



「印文、福德」

- 一、御年貢納所事請納證文明鏡之上、少も於レ無ニ沙汰一者可レ爲ニ曲事一、然者地頭遠路令ニ居住一者、五里中年貢可ニ相届一、但地頭其知行在レ之者、於ニ其所一可レ納事、
- 一、陣夫者貳百俵ニ壹疋壹人可レ出之、荷積者下方升可レ爲ニ五斗目一、扶持米六合、馬大豆壹升地頭可レ出之、於レ無レ馬者步夫貳人可レ出也、夫免者以ニ請負一、一札之内、壹反ニ壹斗引レ之可ニ相勤一之事、
- 一、百姓屋敷分者百貫文ニ參貫文、以ニ中田一被レ下之事、
- 一、地頭百姓等雇年中二十日、并代官雇三日、爲ニ家別一可レ出レ之、扶持米右同前事、
- 一、四分壹者百貫文ニ貳人宛可出之事、

(一一一) 一一一

一、請負御納所、若大風大水大旱年者、上中下共ニ以ニ
春法ニ可ニ相定、但可ニ爲ニ生糶勘定ニ事、

一、竹藪有レ之者、年中ニ公方江五十本、地頭へ五十本
可レ出之事、

右七箇條所レ被ニ定置ニ也、若地頭及ニ難澁ニ者、以ニ目安ニ可
レ致ニ言上ニ者也、仍如レ件、

天正十七年十二月一日 大久保與一郎忠利(花押)

三枚橋四村、

一五五、榊原康政書狀 (折紙)

尙以今度之御馳走共難レ忘存計あれ候、於ニ何事ニも申談
度念願天山ニ候、又北彦助身上之儀、彌貴殿御專ニ
有へく候、御馳走可レ忝候、

誠在陣中八種々申談殊御馳走更ニ難ニ申立候、其後纏而
も可ニ申入ニ候處遅引非ニ本意ニ候、餘無沙汰ニ候間、先如レ
此候、向後之儀彌不ニ相替ニ被レ懸ニ御目ニ候者可レ辱候、於ニ

拙者ニ相應之儀、不レ可レ存ニ疎意ニ候、尙追而可ニ申入ニ候
間、令ニ省略ニ候、恐々謹言、

十一月廿六日 康政(花押)

「(切封) 榊小平

康政

曾我又六様

人々御中

一五六、豊臣秀長書狀

猶、以ニ九兵衛ニ可レ申候□□雲雀の馬返し申候、あいま
ち仕候間、養生仕候て乗可レ申候、以上、

小熊ニ紀州にて遣候知行、其方代官仕、納所可レ仕候、松
永三十郎知行不レ遣候條、當納より押可レ申候、あねニ百
石遣候領知者、當所務与り遣候、是又所務仕候者、遣間
數候條、何も其方代官可レ仕候也、

九月十日 (花押)

須賀野金左エ門尉とのへ

一五七、小早川隆景書狀

猶以、爰元、各々御參會之以後安國寺至開亭可罷越候條
重々其刻可申入候、

先日兩度之御便札何茂相届候、灘目御警固御手前之儀丈
夫被仰付、每事御勝利之由肝要存候、然者御檢使衆爲御
參會中途可有御止之通御紙面相見え候、寒中御苦勞
令察候、拙者事、都より西目開城府郡令在陣程遠
候間此度懸御目間敷と心外候、御陣所南北相隔、又河次
依不自由乍存以書狀も不申通、背本意候、隨而平
安道大明國和與之儀付而去月廿六大唐之使、小攝參會候
間、趣可有相談之由候て、至當地一兩日中攝州被
罷越候、都衆も可有御出之通、被申上候、各被
仰談、定至名護屋可被相同候、先以珍重之儀共候、
當時日本之御到來共候哉、依遠路、會而無其間候、
事々被仰知候者、可爲本望候、猶重々可申承候、
恐々謹言、

十二月六日

小左衛門 隆景(花押)

藤佐様

御陣所

一五八、加藤清正書狀

「曾我又六郎殿

御陣所

加藤主計頭

清正」

追而申入候、仍晉州表之儀去月廿二日諸勢押詰築山仕寄
等、無晝夜之堺、各被仰付候、然處同廿九日申刻ニ
拙者手前之石垣引崩候、依之諸手より巳時乘入一人も
不殘討果申候、右崩口仕寄黒甲同前ニ申付候、大慶不
過之候、様子 勘使能々見及候之條、可有御尋候、
此比赤國へ相働候、彼表之儀、無別條候間可御心安
候、誠遠路度々預御狀候、難謝次第候、猶追而可申
入候條、令省略候、恐々謹言、

七月十六日

清正(花押)

曾我又六郎殿